

## J. S. バッハ作曲「三声シンフォニア」の楽曲分析と演奏解釈

第1番 八長調 BWV 787

藤 本 逸 子

### は じ め に

この小論に先立ち、「J. S. バッハ作曲『二声インヴェンション』<sup>1)</sup>の楽曲分析と演奏解釈<sup>2)</sup>と題し、「第1番 八長調 BWV<sup>3)</sup> 772」から「第11番 ト短調 BWV 782」までの11曲を、「豊橋短期大学研究紀要 第2号」から「同第12号」の各号に、それぞれ楽曲分析し演奏解釈した。また、「第12番 イ長調 BWV 783」から「第15番 口短調 BWV 786」までを、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第14号」から「同第17号」に、同じく楽曲分析し演奏解釈した。この小論も、それらと同じ観点にたって、「三声シンフォニア」<sup>1)</sup>の「第1番 八長調 BWV 787」を取り上げたものである。

### 楽曲分析と演奏解釈

「W. F. バッハのための小曲集」<sup>4)</sup>(以下「Kb. für W.F.B.」)において、この「Sinfonia 1」にあたるのは、49番めの曲で、「Fantasia 1」(BWV 787)と題されている。両者には、装飾音・リズム・臨時記号において、表のような違いがみられる程度で、大きな違いはない。

1) 「二声インヴェンション」と「三声シンフォニア」という呼び名については、豊橋短期大学研究紀要 第2号「J. S. バッハ作曲『二声インヴェンション』の楽曲分析と演奏解釈」藤本逸子1985年(以下「第2号における小論」)の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

2) 作品名・書名・強調語句は、原則として「」に入れて表わす。

3) BWV = Bach-Werke-Verzeichnis, W. シュミーダーによる J. S. バッハ作品総目録番号。

4) 「W. F. バッハのための小曲集」については、「第2号における小論」の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

表 「Sinfonia 1」と「Fantasia 1」の相違箇所

Sinfonia 1		Fantasia 1	
5 <sup>5)</sup>	上声 3 拍め H 音 <sup>6)</sup> 上 ♪ なし	5	上声 1 拍め H 音 <sup>6)</sup> 上 ♪
9	上声 2 拍め Fis 音 G 音 A 音 Fis 音	9	上声 2 拍め Fis 音 G 音 A 音
10	上声 2 拍め Fis 音上 ♪ なし	10	上声 2 拍め Fis 音上 ♪
13	下声 1 拍め D 音 八分音符	13	下声 1 拍め D 音 四分音符
18	下声 2 拍め E 音 D 音 C 音 B 音	18	下声 2 拍め E 音 D 音 C 音 H 音
20	下声 2~3 拍め E 音 F 音 G 音 A 音 C 音	20	下声 2~3 拍め E 音 D 音 E 音 C 音

### 楽 曲 分 析 (譜 1<sup>7)</sup> 参照)

この曲は、二つの部分からなり、それぞれの部分は、次のような構成になっている。

第 1 部 1 ~ 12 (11)

主 題 1 ~ 7 (6)

主 題 7 ~ 12 (5)

第 2 部 12 ~ 21 (10)

主 題 12 ~ 17 (5.5)

主 題 17 ~ 21 (4.5)

### 各部分における楽曲分析

#### 第 1 部

##### 主題

- 1 ~ 3 ・ 1 上声部に主題(T)が現われる。(T)は、十六分音符で 4 度順次上行する要素(a)、十六分音符で 3 度順次上行した後下行する要素(b)、(a)の反行形(v)から成り立っている。(b)の下行の音程は一定ではない。
- ・ 2 上声部には、3 にかけて(b)がリズム的に拡大した(b x)がある。C dur<sup>8)</sup>から G dur に転調する。
- ・ 3 上声部には、拡大された(a)の反行形(v x)がある。G dur から C dur に戻る。
- ・ 2 中声部は、1 上声部の(T)に回答する(T)が C dur から G dur に転調しながら出てくる。
- ・ 3 中声部は、シンコペーションで音が下行している。
- ・ 1 下声部は、主音と導音の後、八分音符に拡大された(a)の反行形(v x)が 2 に向かっている。
- ・ 2 下声部は、1 下声部と同じリズムで、G dur のカデンツの動きをしている。

5) 小節数は、数字を で囲むことによって表わす。例、第 4 小節め 4, 第 3 小節めから第 10 小節め 3 ~ 10。

6) 音名は、原則としてドイツ音名で表わす。例、変口音 B 音, 嬰へ音 Fis 音。

7) この小論における「Sinfonia 1」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1972)を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許可を得て、全音楽譜出版社が、印刷出版している。

8) 調名は、原則として、ドイツ音名を用い、ドイツ音名の太文字は長調、小文字は短調を表わす。例、八長調 C dur あるいは C:、イ短調 a moll あるいは a:。

- ・ [3] 下声部は、C dur に戻って、[1] 上声部と同じ(T)を1オクターブ低く出している。
- [4] ~ [6] 上声部は、[4] ~ [5] にかけて、拡大された(a)の反行形(v x)を二つ置いている。
- ・ [6] 上声部は、(b)の後、[7] 最初のCに終止する動きをしている。
- ・ [4] 中声部は、短く(a)の反行形(v)を出し、上声部と共に下行の動きをしている。
- ・ [5] 中声部は、拡大された(a)の反行形(v x)がある。これも、上声部に沿った動きをしている。
- ・ [6] 中声部は、(v)(v)(q)(b)からなる(T)の反行形(L)がある
- ・ [4] 下声部は、(T)の反行形(L)がある。
- ・ [5] 下声部は、(T)がある。[3] の(T)より、更に1オクターブ低くなっている。
- ・ [6] 下声部は、順次下行して[7] のC音に落ち着く動きをしている。

#### 主題

- [7] ~ [11] 上声部は、拡大された(b)の逆行形(b x)がある。
- ・ [8] 上声部は、(a)と、[9] にかけて、拡大された(a)の反行形(v x)がある。
- ・ [9] 上声部は、(a)(b)が置かれ、[10] でトリルの動きの後、G dur に終止する。
- [10] 3拍めから、[11] にかけて、(T)の反行形(L)がG dur で出てくる。反行形主題の後、d moll に転調しながら、(b)が[12] に繋がっている。
- ・ [7] 中声部は、上声部とリズム的に対比する動きをしている。(T)の断片のように(a)の反行形(v)が4拍めにある。
- ・ [8] 中声部は、3拍めから[9] にかけて、拡大された(b)の反行形(q)がある。
- ・ [9] 中声部は、3拍めから[10] にかけて、(T)の反行形(L)がG dur で出てくる。その後、(a)の反行形(v)が[11] につながっている。
- ・ [11] 中声部は、休符の後、d moll で(b)で現れ、上声部と掛け合いをしている。
- ・ [7] ~ [8] 下声部は、(a)の反行形(v)を二つずつ連結させたパターンが、G dur で3回ゼクエンツした後、[8] の3拍めから、この曲最低音域の(T)が現れ、[9] に続く。
- ・ [10] 下声部は、3拍めでG dur の偽終止をした後、[11] のd moll による(T)の反行形(L)に続く。

## 第2部

#### 主題

- [12] ~ [14] 上声部は、[12] にd moll で(T)が出た後、(a)の反行(v)と(a)が続き、四分音符で、半音階的動きをした後、拡大された(a)の反行形(v x)が続いている。その間d moll, F dur と転調している。
- ・ [12] ~ [14] 中声部は、[12] で休符の後、(a)の拡大された(a x)が出、[13] で(T)がd moll で現れ、[14] で、(b)から(a)の反行形(v)を経て、[15] のF音と続き、F

dur に納まっている。

- ・ [12] ~ [14] 下声部は、[12] で、拡大された(a)の反行形(v x)を2回置いて、しっかり d moll を確保し、[13] で、(a)の反行形(v)をこれまた2回置き、その中で、d moll から F dur へ転調し、[14] で、堂々と F dur で(T)を鳴らしている。
- [15] ~ [17] ・ [15] ~ [17] 上声部は、[15] で [14] から続く拡大された(a)の反行形(v x)が鳴り、F dur から C dur へ転調している。[16] では(a)の拡大された(a x)が出、[17] では [16] の(a x)の最後の音に重なって始まる四分音符による拡大された(b)の逆行形(b x)が続き、再び F dur となる。
- ・ [15] ~ [17] 中声部は、[15] の四分音符と八分音符で、C dur を確保した後、[16] で(T)を C dur で鳴らし、[17] で上声部とリズム的に対比しながら、F dur へ向かう動きをしている。
- ・ [15] ~ [17] 下声部は、[15] で(T)が C dur で鳴った後、[16] で休符に続き、F dur へ向かう(T)の反行形(L)が出てくる。これは、中声部の(T)とストレッタの状態になっており、[17] で F dur に納まる。

主題

- [17] ~ [18] ・ [17] ~ [18] 上声部は、F dur に納まった後、十六分休符を置いて、(a)の反行形(v) (a)と続き、その最後のG音を二分音符で伸ばした後、十六分音符のF dur のカデンツの動きを経て、[19] のF音につながる。
- ・ [17] ~ [18] 中声部は、F dur へ向かいながらもG音を十六分音符で短く係留させ、F音に終わる(a)に繋いでいる。そのF音は、タイで長く伸ばされ、十六分休符の後、二つの(a)の反行形(v)に連なりA音にとどまる。
- ・ [17] ~ [18] 下声部は、(a)の反行形(v)が二つつながる下行音階の形で、3回ゼクエンツしている。ゼクエンツの始まり音は、G音、A音、B音と順次上行している。ただし、3回目のゼクエンツは、B音から始まりH音に至っている。これによって、F dur から、主調 C dur に転調する。
- [19] ~ [21] ・ [19] ~ [21] 上声部は、[20] で十六分音符の(a)の反行形(v)が現れる以外は、四分音符、二分音符、全音符という長い音符による大河の流れのようなカデンツとなり、C音で曲を閉じている。それは、また、拡大された(a)の反行形(v x)の動きでもある。
- ・ [19] ~ [21] 中声部は、リズム的变化の加わった拡大された(a)の反行形(v x)に(b)が続き、G音にとどまった後、(a)の反行形(v)、(b)の反行形(q)、(b)と並び、E音で曲を閉じている。[20] の動きは、上声部の(a)の反行形(v)と連携することによって、(T)の反行形(L)を鳴らしている。
- ・ [19] 下声部は、主題(T)を堂々と鳴らし、[20] では、(a)の拡大形(a x)を二つとG音によるカデンツを置き、[21] のC音に曲を納めている。

## 演奏解釈 (譜2参照)

## テンポ

テンポに関して、諸校訂版<sup>9)</sup>は、表のような指示をしている。

表 諸校訂版における「Sinfonia 1」のテンポに関する指示

校訂者	テンポに関する指示	
Hans Bicschoff	Allegro moderato	♩ = 96
Ferruccio Busoni	Allegro deciso	
S. A. Durand	Andante poco animato	
Vilém Kurz	Allegro non troppo	
Julius Rötgen	Allegro moderato	♩ = 80

また、内外10人の演奏時間<sup>9)</sup>は、表のとおりである。

表 諸演奏家における「Sinfonia 1」の演奏時間

演奏者	録音年	楽器	演奏時間
Aldo Ciccolini	不明	ピアノ	1 24
Christoph Eschenbach	1974年	ピアノ	0 48
Glenn Gould	1963 ~ 64年	ピアノ	0 43
Tatyana Nikolayeva	1977年	ピアノ	0 57
András Schiff	1982 ~ 83年	ピアノ	1 04
高橋 悠治	1977 ~ 78年	ピアノ	1 12
田村 宏	不明	ピアノ	1 03
Kenneth Gilbert	1984年	チェンバロ	1 14
Gustav Leonhardt	1974年	チェンバロ	1 12
Helmut Walcha	1961年	チェンバロ	1 29

演奏時間の差は、グールドとヴァルハでは、2倍以上ある。両者には、ピアノとチェンバロという楽器の違いもあるが、それ以上に解釈の違いが大きい。ヴァルハは、どっしり落ち着いた演奏であり、本来ピアノよりもレガート感を出しにくいチェンバロでありながら、非常にレガートに演奏している。それに対し、グールドは、速い動きもノンレガートで粒の目立つ濃い音を出している。同じように演奏時間が短いエッセンバッハのあっさりした演奏に対しても、グールドのそれは、対照的である。

筆者は、「Moderato ♩ = 80」というテンポをとる。C durの素直さを少しゆっくりめの中庸なテンポの中で表現したい。

9) 各校訂版及び、各CDの出版については、本小論の「参考文献・参考楽譜・参考CD」の項を参照のこと。

### アーティキュレーション

全曲を通じて、華やかさや技巧を凝らすよりは、素直さを求めたい。加工されていない美しさ、白湯の美味しさのようなものを表現したい。十六分音符は*legato*に、タイのついていない八分音符はおおむね*non legato*にする。四分音符は横の流れを大切にした*legato*に、二分音符は充分響かせ伸ばす。区切りを感じる場所は( | ), プレスがほしいところは( V )で示した。

### 装飾音

白湯の美味しさを求めるため、装飾音は、必要最小限としたい。装飾音の加え方は「譜2」に小音符で記した。

### 各部分における演奏解釈

- ① ~ ② ・ *mf* が出る。
- ・ ① 上声部(T)は、① 3拍め頭のG音に向かって、少し *cresc.* する。このG音が、(T)のクライマックスである。① 4拍めから2の頭にかけて、ほんの少し *dim.* して(T)を納める。下声部は、豊かに響かせて(T)を支える。
  - ・ ② 中声部(T)は、*mp* で、① 上声部に準じる。下声部は丁寧に響かせ、(T)を支える。上声部は長い音による順次上行をレガートに弾く。
- ③ ~ ⑥ ・ 少し強めの *mf* とする。
- ・ ③ 下声部の(T)と④ 下声部の(L)は、ゆるやかな *cresc.* とゆるやかな *dim.* で、二つ対にして会話を楽しむようにする。③ ~ ④ 上声部と中声部は、シンコペーションのリズムと係留の音の響きを楽しむ。
  - ・ ⑤ 下声部の(T)は、③ より更にどっしりした(T)とし、⑥ 中声部の(L)との会話を楽しむ。⑥ 4拍めは、上声部にトリルを加え、ほんの少々テンポをゆるめ、*dim.* しながら、⑦ の頭のC音に納める。
- ⑦ ~ ⑪ ・ *P* が出る。
- ・ ⑦ ~ ⑧ 下声部の下行音階は、ゼクンツのブロック毎に段階的に *cresc.* していき、⑧ 3拍めから始まる(T)は、*f* が出る。この(T)は、最低音域の(T)であり、1部のクライマックスとなる(T)である。堂々と響かせた後、⑨ 3拍めのH音に少し *dim.* しながら納める。
  - ・ ⑦ ~ ⑨ 上声部と中声部は、下声部の動きの上によって、細かい会話のような動きを楽しむ。
  - ・ ⑨ ~ ⑪ は、⑨ 3拍めに納まった(T)の後、しばらく、細かいモチーフの組み合わせで、静かに動いた後、⑩ 3拍めから上声部に(L)がでる。これは、存在を明らかにするような主張的な音で出る。上声部の(L)が終わる前、⑪ 1拍めから、下声部に(L)がでる。これも、やや主張的な音にし、ストレッタを意識する。⑪ 3~4拍めは、下声部の(L)の終わりにあわせ、ほんの少々テンポをゆるめ *dim.* して⑫ の頭の音に *P* で納める。

- 12 ~ 17
- 12 は *P* で出て、16 まで長い *cresc.* とし、16 から 17 にかけて *f* で高らかに歌う。
  - 12 上声部の(T), 13 中声部の(T), 14 下声部の(T), 15 同じく下声部の(T), 16 中声部の(T)と、(T)毎に段階的に *cresc.* していく。めまぐるしい転調による、それぞれの(T)の調の違いを意識する。
  - 12 上声部 4 拍めの(T)の中における減 5 度は、他の(T)には見られない音程であり、(T)としては、この曲最高音域にあたるので、弱い音ながら、重みを持って弾く。
  - 16 上声部 3 拍めからの四分音符の動きは特に注意し、17 1 拍めの C 音は、この曲における最高音として少し *ten.* 気味にして意識する。
  - 17 1 拍めで高らかに歌った後、3 拍め頭に *mp* で納める。
- 17 ~ 21
- 17 3 拍めは、*mp* で始める。17 ~ 18 の下声部の下行音階は、7 ~ 8 の下声部の下行音階と同様、ゼクンツのブロック毎に段階的に *cresc.* していき、19 の *mf* まで持っていく。
  - 17 ~ 18 上声部と中声部は、これもまた、7 ~ 9 上声部と中声部のように、下声部の動きの上によって、細かい会話のような動きを楽しむ。
  - 19 下声部は、最後の(T)を堂々と奏で、20 のややリズムミクなカデンツを経て、少しテンポをゆるめながら、21 の C 音に緩やかに至り曲を終わる。
  - 19 上声部と中声部は、18 から続く会話を楽しみ、20 では、下声部の軽やかな動きによって、上声部と中声部が共同して作る(L)で、19 下声部の(T)と呼応し、これも、緩やかに21 の C 音と E 音に至って曲を閉じる。

## お わ り に

「三声シンフォニア」の最初の曲である。C durらしい、てらいのない作風となっている。また、21小節の曲であるにもかかわらず、反行形を含めてテーマが18回も出てきており、間奏の入り込む余地がないほどテーマで埋めつくされた堅牢な曲でもある。それでいて、一種大らかな広がりを感じる。それは、C durの調性によるものであろうか。作風によるものであろうか。おそらく、バッハの特質であろう。

譜1 「Sinfonia 1」BWV 787 [1] ~ [21] (楽曲分析)

第1部  
主題

1

C: G:

3

G: C:

5

C:

7

主題

C: G:

9

G:



第2部  
主題

T

11

q a b a a b b v ax

G: d: v q b v ax

L

13

v a a v ax v ax

d: F: a a T b v b v a a b v

T

15

ax q x

F: C: a a T b v v v

T L

17

主題 v a v v v

C: F: q b v v v v v v

19

v L ax b v q b ax ax

F: C: a a b v ax ax

T

譜2 「Sinfonia 1」BWV 787 [1] ~ [21] (演奏解釈)

Moderato

[1] *mf* *mp*

[3] TとIが会話をするように *mf*

[5] *mf* どしりと *f* ほんの少しテンポをゆるめる

[7] *p* *mp* *mf* *f* *cresc.* 最低音域のT

[9]

11

減5度

ほんの少しテンポをゆるめる

*p* poco a poco cresc.

13

半音の動き

半音の動き

15

(w)

17

最高音

最高音

*f* *mp*

cresc.

19

Tに答えるように

*mf*

Tに答えるように

堂々と最後のT

テンポをゆるめる

## 参考文献・参考楽譜・参考CD

## \* 参考文献

- 市田儀一郎 1983年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(音楽之友社)  
 山崎孝 1984年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(ムジカノーヴァ)

## \* 参考楽譜

- Johann Sebastian Bach「Klavierbüchlein für Wilhelm Friedemann Bach」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1979)  
 BACH「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1972)  
 J. S. BACH「Inventionen Sinfonien」Urtext (G. Henle Verlag, München 1978)  
 J. S. Bach「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Musikverlag Ges. m.b. H & Co., K. G., Wien 1973)  
 BACH「INVENTIONEN UND SINFONIEN」Urtext (Edition Peters, Berlin 1933)  
 Johann Sebastian Bach「TWO- and THREE-PART INVENTIONS」Facsimile of the Autograph Manuscript (Dover Publications, Inc., New York 1978)  
 J. S. BACH「15 INVENTIONEN」Hans Bischoff (Steingraber Verlag, Offenbach)  
 BACH「TWO- and Three-Part Inventions」Ferruccio Busoni (G. Schirmer, New York 1967)  
 J. S. BACH「Inventions à 2 et 3 voix」Durand S. A. (Editions Musicales, Paris 1957)  
 BACH「DVOUHLASE INVENCE A TRIHLASE SINFONIE」Vilém Kurz (Editio Supraphon, Praha 1981)  
 JOH. SEB. BACH「ZWEI- UND DREISTIMMIGE INVENTIONEN」Julius Rötgen (Universal Edition, Hungary 1951)  
 長岡敏夫編「バッハ インヴェンションとシンフォニア」原典版(音楽之友社 1965)  
 角倉一朗校訂「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」原典版(カワイ出版 1983)  
 全音楽譜出版社出版部編「バッハ インヴェンション」(全音楽譜出版社)  
 Hans Bischoff 角倉一朗訳「J. S. バッハ インヴェンションとシンフォニア」(全音楽譜出版社 1972)  
 Ferruccio Busoni 伊藤義雄訳「二声インヴェンション」(Breitkopf & Hartel, Frankfurt 1914)  
 井口基成「バッハ集 二声部インヴェンション 三声部インヴェンション 小前奏曲・小フーガ」(春秋社 1983)  
 千倉八郎編「バッハ インヴェンションとシンフォニア」(日音楽譜出版社 1983)

## \* 参考CD

- Aldo Ciccolini (Piano)「J. S. BACH INVENTION」TOCE6601 (TOSHIBA EMI)  
 Christoph Eschenbach (Piano) 1979「INVENTION & SINFONIA」F26G20323 (POLYDOR)  
 Glenn Gould (Piano) 1989「BACH INVENTIONS & SINFONIAS」28DC5246 (CBS SONY)  
 Tatyana Nikolayeva (Piano) 1986「J. S. Bach INVENTIONS AND SINFONIAS」VDC-1079 (VICTOR)  
 András Schiff (Piano) 1985「J. S. BACH 2 & 3 PART INVENTIONS」FOOL-23100 (POLYDOR)  
 高橋悠治 (Piano) 1991「インヴェンションとシンフォニア 他」COCO-7967 (NIPPON COLUMBIA)  
 田村宏 (Piano) 1989「J. S. バッハ インヴェンション」CG-3722 (NIPPON COLUMBIA)  
 Kenneth Gilbert (Cembalo) 1985「J. S. BACH INVENTIONEN UND SINFONIEN」POCA-2113 (ARCHIV)  
 Gustav Leonhardt (Cembaro) 1992「バッハ：インヴェンションとシンフォニア」BVCC-1863 (BMG VICTOR)  
 Helmut Walcha (Ammer-cembaro) 1961「J. S. バッハ / 2声部のためのインヴェンション & 3声部のためのシンフォニア」TOCE-7231 (TOSHIBA EMI)